

日本語の史的研究の現状と展望

朴孝庚*

〈 Abstract 〉

Current Trends and Prospects of Studies on the History of Japanese Language

This study outlines and examines the trend observed in 115 Japanese history studies published in Korea from 2017 to 2018. The papers on Japanese history were compiled in chronological order by dividing them into five categories: characterization, phoneme, vocabulary, grammar, and others (translation and bibliographic research). The overall features can be summarized as follows: (1) There are a significant number of studies based on foreign materials related to Japanese and multilingual materials used in combination with Japanese, Chinese, Korean and English. (2) The papers focusing on the history of Japanese are concentrated in the transition from the Middle Ages to the early Modern, or from the early Modern to the recent times. (3) Modern data are studied in a wide range of areas, including vocabulary exchanges, translations and colonial education in East Asia, and is expected that this trend continues to increase.

As an overall trend, since it is the historical study of language, many papers have adopted the methodology of traditional Japanese study that is based on the bibliographic methodology. On the other hand, the subject of the study is expanding to deal with the language exchange and influence of Chinese character cultures such as China and Vietnam. It is expected that history researches of Japanese language will further be active through globalization and diversification.

Field: Japanese History

Keywords: The usage of Ghana, The sound of Chinese characters, The change of grammar,
The exchange of modern languages, The colonial textbooks

1. はじめに

本稿では、2017年1月から2018年12月にかけて、韓国で発行された学術誌に掲載された日本語史関係の論文を概観し、研究の傾向と今後の展望について述べる。日本語関連の学術誌から103本の日本語史の論文を抽出し考察を行った。日本語史研究は、基本的に残された文献と残された言葉をもとに議論を進めるため、新たな資料の発見やすでに知られている資料の価値の再認識が重要であり、資料の分析方法においては、伝統に従う傾向があったといえよう。最近では、こういった従来の研究とコーパスを利用した大規模、もしくは、一つの時代を越える長い期間に及ぶ調査も活発に行われている。

今回は、上記の一般的な日本語史研究の特徴をふまえた上で、最近2年間の韓国で行われた関連研究ではどのような特徴がみられたか、また今後はどのような流れで展開していくのかについて概観する。2015年から2016年度に発表された日本語史関連の論文については、康仁善(2017)の先行研究がある。今回の調査と考察においては、康仁善(2017)にならい、調査対象となった論文を大きく次の5つの分野

* 漢陽サイバー大学校 助教授、日本語学

(1) 文字表記 (2) 音韻¹⁾ (3) 語彙 (4) 文法 (5) その他 (翻訳・書誌学的な研究を含む)²⁾に分け、各分野を章立てにし、時代順に述べることにする。

2. 研究資料と研究方法

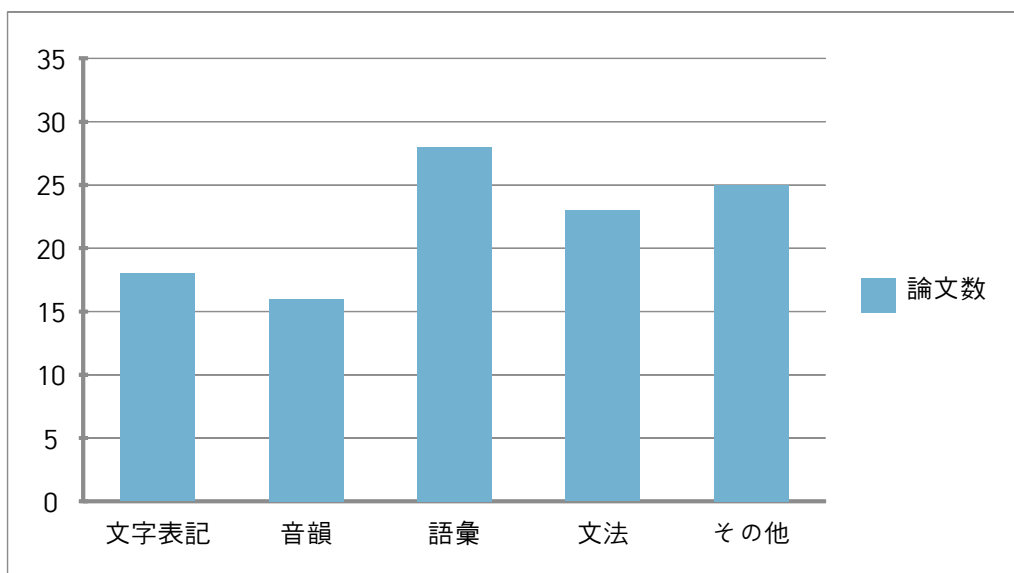
今回調査した学術誌は韓国研究財団の学術誌引用索引サイトKCI(Korea Citation Index)で「日本語と文学」に分類された掲載学術誌であり、日本語関連の学術誌の他にもKCIで「日本語史」をキーワードにして検索、ヒットした論文を加えた³⁾。以下、論文のリストと日本語史関連論文の数を〈表1〉に示す。

〈表1〉日本語関連学術誌別の日本語史論文数

	学術誌(発行機関)	論文数
1	『日本語学研究』 韓国日本語学会	13
2	『日本言語文化』 韓国日本言語文化学会	13
3	『比較日本学』 漢陽大学校 日本学国際比較研究所	12
4	『日本語文学』 韓国日本語文学会	8
5	『日本研究』 中央大学校 日本研究所	8
6	『日本学報』 韓国日本学会	7
7	『日本近代学研究』 韓国日本近大会	6
8	『日本文化学報』 韓国日本文化学会	6
9	『日本語教育』 韓国日本語教育学会	5
10	『日本研究』 韓国外国語大学校日本研究所	5
11	『日本文化研究』 東アジア日本学会	4
12	『日語日文学研究』 韓国日語日文学会	4
13	『口訣研究』 口訣学会	4
14	『日本語教育研究』 韓国日語教育学会	3
15	『日本語文学』 日本語文学会	3
16	『日本学』 東国大学校 日本学研究所	2
17	『日本学研究』 檀国大学校日本研究所	1
18	『日語日文学』 大韓日語日文学会	1
19	『日本研究』 高麗大グローバル日本研究院	1
20	『東西哲学研究』 韓国東西哲学会	1
21	『社会와 歴史』 韓国社会史学会	1
	計	108

108本の論文を分野別に分けると以下のような分布となる。

- 1) 日本語学の概説などでは、「音声音韻」として分類されるが、明治期以前の音声資料はほとんど残っておらず、今回調べた論文の中では音声を対象としたものは存在しなかったため、「音韻」だけを章立てにした。ここでは、康仁善(2017)と沖森(2017)の分類を参考に、音韻だけを扱うことにする。
- 2) 康仁善(2017)では「6. 近代朝鮮語学習書」という章立てだが、今回は、近代以外の書誌研究もあり、朝鮮語学習書以外の文献に対する研究も多かったため、「その他」という用語に変え、議論を進めた。
- 3) 口訣學會は〈日本語と文学〉分野に入っていないが、日本語史関連の論文が多く載っていることから、資料に加え調査した。哲学と社会分野からも「日本語史」のキーワードで検索された論文があったため、リストに加えた。一方、『翰林日本学』(翰林大日本学研究所)は、KCIの「日本語と文学」に入っているが、日本語史関連論文がなかったためリストから外した。



〈図1〉 分野別論文数

分野別の内訳は、文字表記は17本⁴⁾、音韻は15本、語彙は28本、文法は23本、その他は25本である。さらに詳しく内訳を調べると、論文作成言語は韓国語が66本、日本語が42本と韓国語のほうが多かった。執筆者の内訳は韓国人が72名、日本人が8名である⁵⁾。また共同研究は108本中10本と非常に少なく、いずれも執筆者数は2人であった。論文の言語および著者の分布を以下の〈表2〉に示す。

〈表2〉 論文の言語および著者の分布

分野	論文の言語		著者の国籍				
	韓国語	日本語	韓国人	日本人	中国人	共同	単独
文字表記	8	9	8	4	–	1	16
音韻	11	4	13	–	1	3	12
語彙	13	15	10	2	–	2	26
文法	15	8	19	1	–	1	22
その他	19	6	22	1	–	3	22
合計	66	42	72	8	1	10	98

各分野の論文は時代順に述べることにするが、時代を指す用語は各論文別にことなる場合がある⁶⁾。無理に用語を統一することなく、用語の用い方も含めなるべく各著者のことばで論文について紹介したい。その際、用語の混乱を避けるために、沖森（2017）を参考に時代区分を簡略にまとめておく。

4) 訓点関連の論文は文字表記に分類しているが、訓点資料の論文でも著者が「音韻的な研究」と明らかにした場合は音韻の方に分類した。

5) 論文の数と著者の数があわないのは、一人の著者が2本、多くは4本の論文を書いた場合があるためである。

6) 例えば、奈良時代の資料について言及する際、「上代」という用語も「古代」という用語も使われている。

〈表3〉日本語史の時代区分

古代	上代	奈良時代とそれ以前	～794年
	中古	平安時代	～1086年
中世	前期	院政鎌倉時代	～1333年
	後期	室町時代	～1603年
近世		江戸時代	～1867年
近代		明治以降	1868年～

3. 分野別

3.1 文字・表記

まず、古代の音韻の研究には、高秀晩(2018)があげられる。上代特殊仮名遣いのエ列の使い分けについて、従来の母音の差によるもの、口蓋化した子音と非口蓋化の子音との差異によるものという説に疑問を提起し、列音の生成および四段活用動詞の命令形と已然形の区別など日本語内部の音韻現象から考え、エ列の使い分けは、子音を口蓋化させる母音と口蓋化させない母音との対立に因るものとみるべきだと指摘している。

朴美賢(2017)は、13世紀の注釈書『釋日本紀』にあらわれた韓国系固有名詞の声点について調べ、日本書紀の古本系統の岩崎本・前田本・図書寮本・兼右本と同様の傾向をみせていることを確認し、他の古本系統から少し離れた時代だが、『釋日本紀』は韓国系固有名詞の声点資料としてその価値が認められるとしている。同じく声点資料について調べたものには、金正彬(2018)があり、「安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經」の音字注にみられる声点について考察している。安田本の大般若波羅蜜多經は鎌倉時代にまとめられ、複雑な声点の様子をみせているとし、音声音韻学的な視点からの分析を試みている。

続いて、音韻の分野で多数をしめているのは漢字音の研究であり、時代順にキム・デソン・金永和(2017)があげられる。日本と韓国の古代資料にあらわれた「へ(乙類)」と「[ㅍ](船)(pei)」の関連性について、主に中国の漢字音の輸入時期を考慮に入れ、多角度から考察している。

中国の漢字音との関連から、中古音の多音字について活発な研究が行われていることを紹介したい。李京哲・呉采炫(2017)、李京哲(2018a, 2018b, 2018c)では、中国の中古音の中で多音字についてその類型や陽声韻の互用、入声と陰声の互用などを考察し、持続的に発表をしている。日本語史の分野ではないが、こういった成果をもとに、現代の常用漢字表の音韻の面からの考察を続けている。

中世から近世にかけての変化に注目している論文もある。まず、李承英(2017)は、中世の韻書文明版『聚分韻略』(1486)・慶長版『聚分韻略』(1612)・『略韻』(1279)の漢字音、特に呉音・漢音・唐音の対立が顕著である唇内撥音字を中心に三書の左右音注および注記を比較、検討している。

韓昇濤(2017)は、清原宣賢の訓点本『中庸章句』に訓点と一緒に表記された分節音素に準じて音読みを表わした仮名、及び、超分節音素を表わした声点を中心として、『經典釈文卷第十四』に現れる『禮記中庸』に対する音切(直音及び反切)との比較を通じて、日本の訓点本に中国原書の音義が如何に反映されたのかを論じるものである。

また、蔣垂東(2017)では、中国と日本の漢字音と母音の歴史的な傾向 - 室町時代から明治時代までを考察し、中国人が日本語のウ列母音を非円唇舌尖前母音、日本人が中国語の非円唇舌尖前母音をウ列の

母音としてとらえてきたことを明らかにしている。

日本と中国の漢字音の他に、漢字文化圏に研究対象を広めた論文もある。李相怡・李京哲(2017)では、ベトナムの漢字音の中で舌音系について、韓国と日本の漢字音と比較し分析している。その結果、舌音系全体の体系を支えているのは中古音の切韻音であり、一部南北朝音が混在していると指摘している。李相怡(2012)からベトナムの漢字音について考察をつづけており、そのシリーズの一つとみられる。一方、趙大夏(2018)では、『琉球館譯語』の中国語と『語音翻譯』の中期朝鮮語にあらわれた琉球語母音の音訳表記を調べ、音韻史の観点から琉球語の母音体系について考察した。15~16世紀の琉球語の母音体系には中舌母音が存在しており、頭子音の調音位置や音の長短によって異音で聞き取れた可能性があること、古代琉球語の母音体系は四つの母音体系であったと推定されることなどを明らかにしている。趙燭熙(2018)では、朝鮮王朝實錄に見られる日本音漢字表記、特に音訳表記の日本人名を調査分析し日本語音韻資料としての価値について述べている。同じく朝鮮時代の資料についての考察では、金英玉(2017)がある。15世紀から18世紀の倭学書にあらわれた韓国語の音注を調べ、中国資料とキリシタン資料を比較、考察している。17世紀をさかいに「チ」と「ツ」が破擦音化すること、18世紀以後の資料には母音を「ㄷ」から「ㄴ」へと変えて表記することなど、日本語の変化に敏感に反応、教育に反映したことがわかる。

最後に、趙來喆(2018)では、ア行・ヤ行・ワ行の変化、サ行子音とタ行子音の変化、ハ行音の変化など、日本語史における代表的な音韻変化を概観し、現代の日本語教育に関連付けて述べている。この論文は、韓国日本語学会の『日本語文学』76輯の企画論文「日本語史の観点から見た言語変化の力動性」として発表された。

3.2 音韻

まず、古代の音韻の研究には、高秀晩(2018)があげられる。上代特殊仮名遣いのエ列の使い分けについて、従来の母音の差によるもの、口蓋化した子音と非口蓋化の子音との差異によるものという説に疑問を提起し、列音の生成および四段活用動詞の命令形と已然形の区別など日本語内部の音韻現象から考え、エ列の使い分けは、子音を口蓋化させる母音と口蓋化させない母音との対立に因るものとみるべきだと指摘している。

朴美賢(2017)は、13世紀の注釈書『釋日本紀』にあらわれた韓国系固有名詞の声点について調べ、日本書紀の古本系統の岩崎本・前田本・図書寮本・兼右本と同様の傾向をみせていることを確認し、他の古本系統から少し離れた時代だが、『釋日本紀』は韓国系固有名詞の声点資料としてその価値が認められるとしている。同じく声点資料について調べたものには、金正彬(2018)があり、「安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經」の音注字にみられる声点について考察している。安田本の大般若波羅蜜多經は鎌倉時代にまとめられ、複雑な声点の様子をみせているとし、音声音韻学的な視点からの分析を試みている。

続いて、音韻の分野で多数をしめているのは漢字音の研究であり、時代順にキム・デソン・金永和(2017)があげられる。日本と韓国の古代資料にあらわれた「へ(乙類)」と「ㅍ(船)(pei)」の関連性について、主に中国の漢字音の輸入時期を考慮に入れ、多角度から考察している。

中国の漢字音との関連から、中古音の多音字について活発な研究が行われていることを紹介したい。李京哲・呉采炫(2017)、李京哲(2018a, 2018b, 2018c)では、中国の中古音の中で多音字についてその類型や陽声韻の互用、入声と陰声の互用などを考察し、持続的に発表をしている。日本語史の分野ではないが、こういった成果をもとに、現代の常用漢字表の音韻の面からの考察を続けている。

中世から近世にかけての変化に注目している論文もある。まず、李承英(2017)は、中世の韻書文明版『聚分韻略』(1486)・慶長版『聚分韻略』(1612)・『略韻』(1279)の漢字音、特に呉音・漢音・唐音の対立が顕著である唇内撥音字を中心に三書の左右音注および注記を比較、検討している。

韓炆浩(2017)は、清原宣賢の訓点本『中庸章句』に訓点と一緒に表記された分節音素に準じて音読みを表わした仮名、及び、超分節音素を表わした声点を中心として、『經典釈文卷第十四』に現れる『禮記中庸』に対する音切(直音及び反切)との比較を通じて、日本の訓点本に中国原書の音義が如何に反映されたのかを論じるものである。

また、蔣垂東(2017)では、中国と日本の漢字音と母音の歴史的な傾向 - 室町時代から明治時代までを考察し、中国人が日本語のウ列母音を非円唇舌尖前母音、日本人が中国語の非円唇舌尖前母音をウ列の母音としてとらえてきたことを明らかにしている。

日本と中国の漢字音の他に、漢字文化圏に研究対象を広めた論文もある。李相怡・李京哲(2017)では、ベトナムの漢字音の中で舌音系について、韓国と日本の漢字音と比較し分析している。その結果、舌音系全体の体系を支えているのは中古音の切韻音であり、一部南北朝音が混在していると指摘している。李相怡(2012)からベトナムの漢字音について考察をつづけており、そのシリーズの一つとみられる。一方、趙大夏(2018)では、『琉球館譯語』の中国語と『語音翻譯』の中期朝鮮語にあらわれた琉球語母音の音訳表記を調べ、音韻史の観点から琉球語の母音体系について考察した。15~16世紀の琉球語の母音体系には中舌母音が存在しており、頭子音の調音位置や音の長短によって異音で聞き取れた可能性があること、古代琉球語の母音体系は四つの母音体系であったと推定されることなどを明らかにしている。趙燭熙(2018)では、朝鮮王朝實錄に見られる日本音漢字表記、特に音訳表記の日本人名を調査分析し日本語音韻資料としての価値について述べている。同じく朝鮮時代の資料についての考察では、金英玉(2017)がある。15世紀から18世紀の倭学書にあらわれた韓国語の音注を調べ、中国資料とキリシタン資料を比較、考察している。17世紀をさかいに「チ」と「ツ」が破擦音化すること、18世紀以後の資料には母音を「ㄱ」から「ㄴ」へと変えて表記することなど、日本語の変化に敏感に反応、教育に反映したことがわかる。

最後に、趙來喆(2018)では、ア行・ヤ行・ワ行の変化、サ行子音とタ行子音の変化、ハ行音の変化など、日本語史における代表的な音韻変化を概観し、現代の日本語教育に関連付けて述べている。この論文は、韓国日本語文学会の『日本語文学』76輯の企画論文「日本語史の観点から見た言語変化の力動性」として発表された。

3.3 語彙

語彙、特に意味論は、語学だけではなく他の分野との関連があるものが多い。上代・中世・近世の古典文学のテキストにあらわれた単語の意味を分析する論文は、古典文学の研究とのさかいがはっきりしていない場合がある。近代は、歴史・思想史の分野に含まれる研究も多い。ここでは、なるべく緩い基準を適用し、テキストにあらわれた個々の単語の意味について語学的な分析が含まれている場合は語学の論文と判断、紹介したいと思う。

3.3.1 各時代の資料に基づいた研究

まず、上代の語彙研究として柳玟和(2017)があげられる。日本に渡った高句麗の僧侶、道顯の『日本世記』における人名記載を考察している。『日本世記』は『日本書紀』に部分引用されており、韓半島関連の対外関係記事における資料的な価値が認められる。この論文では、特に高句麗、唐の人名は、官職名・国名を付した記載様式を取っているが、百濟、新羅の人名においては国名、官職名、姓氏などが省かれた形になっている点などが明らかになった。

時代は少し下り、朴善玉(2017、2018)では、中世日本語史の重要なテキスト『平家物語』と『日葡辞書』にあらわれた混種語の語構成と構成要素について考察している。語彙研究の代表的な方法論を用い、詳細に考察した論文であり、現代日本語にも残っている混種語が多いことを指摘している。同じく中世のテキストを対象にした研究にはイ・ヨンスク(2017)がある。『平家物語』と『イソボ物語』、そのほか『狂言』を中心に「懐かし」と関連してその類義語である「恋し」と「思ふ」の意味用法と特質、その史的变化について考察している。

続いて、近世・近代のテキストに中国語および中国文学からの影響を考察した羅工洙(2017a、2017b、2018a、2018b)がある。近世に入ってきた中国の白話文学などから「標致」類、「阿～」系列の呼称、接尾辞「～家」、人称代名詞「儂(咱)・渠」の受容と意味用法について述べている。明治期に西洋の翻訳語が広く知られているが、活発な漢語の翻訳ができた背景として、近世から近代にかけて中国語の口語の影響があったことに着目した、興味深い論文のシリーズである。一方、ヒョン・ヨンミ、イ・キョンギョ(2017)では、「悶々」「喧々」など、漢語オノマトペが古典中国語から受容され、明治期の文学作品に用いられていたことについて述べている。

近代は西洋から新しい文物が輸入され、語彙の分野でも多くの変化が見られた。李炳萬・李東郁(2017)では、小説『金色夜叉』にあらわれた人称代名詞について考察している。その比較群を『日本口語入門』と『和英語林集成』など、当時の語学の学習教材や辞書類と比較し、総合的に近代の人称代名詞について考察している。副詞用法の定着についての論文もあり、趙英姫(2017)では雑誌『太陽』と青空文庫資料を利用し、明治期から昭和期までの近現代語における「多分」の陳述副詞用法の定着過程について考察し、名詞用法及びその周辺の例、事態成立の可能性を表す用法を経て事柄的な成分から陳述的な成分になっていく過程を明らかにしている。鄭夏美(2018)は、植民地時代のソウルの日本式地名について考察している。ソウルの行政区域から詳細調査しており、語学の研究よりは社会史の分野に近いとも見て取れるが、地名の由来についても触れているなど、近代日本語関連で一読に値する、興味深い論文である。

一方、石塚令子(2017)は、日本の「車(クルマ)」と韓国の「구르마」の語誌について述べており、日本から輸入された語彙としては「責任」「民主」などの二字漢語が主に研究対象になっているなか、固有日本語(和語)をそのまま音訳して受け入れたものに関する、数少ない論文といえる。

3.3.2 近代の概念史及び辞書類研究

近代の語彙研究においてもっとも多く発表されているのは、いわゆる「概念史」に括られるものである。まず、李慈鎬(2017)では、韓国・中国・日本で「シャンパン」という言葉の表記と概念について調べ、漢字文化圏での語彙の受容と交流について述べている。続いて李慈鎬(2018)では、韓国のキリスト教用語「礼拝堂」と「教会」の交替について述べている。崔瓊玉(2017)では、「society」が「社会」に、崔瓊玉(2018)では、「liberty」が「自由」に翻訳、韓国で受容され用いられるようになった過程を、様々

な資料を通して考察している。また、尹榮珉(2017)では、近現代日本の文法書に用いられた「文法」という概念と定義について述べており、尹榮珉(2018)では、『皇國文典初學』の「文法」を、『日本小文典』と『日本文章法初歩』との比較を中心に考察している。従来あまり紹介されていなかった、近代韓国の語学書・文法書の紹介もかねており、今後多角度からの研究が期待される。朴孝庚(2017)は、「浪漫」という近代語の成立と変遷について述べている。

近代の翻訳語についての研究は、日本語学だけではなく、多様な専門分野からも述べられている。まず、キム・ソンウン(2017)は、近代朝鮮の宣教医療に関する歴史的な状況について考察し、日本語の「実用解剖学」から韓国語「해부학」へと翻訳され受容された経緯を追っている。キム・ソングン(2017)では、明治期の日本の「物理学訳語会(1883)」の設立を中心に、東アジアの近現代物理学用語の成立について述べている。また、ソ・ホ Chol(2018)では、「七情」から「感情」という概念を使うことになる過程を追い、「感情」に関する翻訳語の成立と受容について考察している。おそらく、日本語学関連学会や研究会の雑誌の他に、語学、文学、歴史学、哲学、社会学の分野でも翻訳語についての関連論文が載っているものと推測される。学際的研究と交流が望まれるところである。

最後に、語彙研究においてもっとも基本的な研究である、辞書関係の研究について触れたい。

朴均轍(2017)では、大正から昭和期に活動した法学者、井上忻治が著した『最新独和法律経済辞典』4種を紹介し、原語及び訳語における変化の様相について考察している。初版は1909年、同著者の『独和法学大辞典』を増補改訂したものであることは朴均轍(2015)ですでに明らかにしており、その後続研究である。法律・経済用語の成立と定着を明らかにするという語彙史的な意義があるといえる。イ・ヒョンジョン(2018)では、20世紀初めの新語が現代日本語に残っている様子を調べるといった目的で、辞典・コーパス・グーグルの検索エンジンなどを活用する試みをしている。塩田雄大(2018)は、現役のNHK研究員である立場から、『辞苑』と『放送用語調査委員会決定語彙記録(一)』を対照し、1930年代後半の漢語の読み方の整理状況について考察している。

辞書を研究対象としたわけではないが、邢鎮義(2017, 2018)は、明治期の本格的な近代辞書『言海』とその著者大槻文彦の言語観について考察している。近代「国語」の成立と辞書との関係についての興味深い論文であり、近代の辞書を考える上で一読に値する。

3.4 文法

文法の研究は、特定の表現の史的変遷について述べるものと特定の資料にあらわれた文法現象について述べるものに大別できる。

3.4.1 特定の表現を中心に述べた研究

まず、特定の表現の史的変遷を時代順に追っていくと、まず、朴鍾升(2018)があげられる。「日本語歴史コーパス」(CHI)検索を利用し、8世紀から10世紀までの受身表現を抽出、その変化の様子を概観した。また、李妙熙(2018)は、中世から近代にかけて助詞「なり」の用法を「不十分終止から並立助詞へ」と「並立助詞から副助詞へ」とに分け、その変遷の過程を考察している。金平江(2017)では、室町時代の存在表現、特に連体修飾について述べている。「場所+なる+名詞」は使用減少、「場所+にある+名詞」は使用増加、「場所+な+名詞」が新たに使われるようになることを明らかにしている。イ・スヒャン(2017a)では、中世の口語資料として『大蔵虎本狂言』と文語資料として『国字本伊曾保物語』を取り上げ、その中にあらわれた「べし」の使用について考察している。イ・スヒャン(2017b)では、『天草本

『伊曾保物語』と『国字本伊曾保物語』の推量表現について考察している。

安志英(2018a)では、起点・終点・範囲をあらわす複合辞「-からして」の変遷について考察している。複合辞は近代の語法として知られており、初出の時期と変遷過程において究明すべきところがあり、理由をあらわす「-からして」は1906年が初出とされたが、この論文の考察から1787年ごろの口語資料にも用いられていたことがわかった。林禊映(2018a)では、主に副詞用法で用いられた「いかにも」「なかなか」「まことに」が応答型の感動詞として用いられるようになった変化をたどっている。3語の用法は近代以降は衰退するが、ある語が感動詞化する事例全体からすれば、一定の副詞群において共通する変化現象であると指摘している。林禊映(2018b)では、副詞句「ことに」の成立をめぐり、中世後期に初出例が見られ、近世にかけて徐々に散見されるようになることや、形容(動)詞や動詞に後接する副詞句となる変化の様相などを明らかにしている。

一方、朴栄淑(2017)では、明治期の言文一致体小説の地の文から、言いさし文を抽出、分類しその特徴について述べている。指定詞が省略された形の名詞止め文が多くを占めており、指定詞表現に積極的に踏み切れなかった当時の事情を物語っていると指摘している。なお、この論文は、文体の論文ではあるが、今回の調査では文章・文体の論文が少なく、章立てはせず、文法項目で述べることにした。

3.4.2 特定の資料を中心に述べた研究

続いて、特定の資料にあらわれた文法現象を扱っている論文について、時代順に触れていく。野田高広(2018)は13世紀前半の説話集『宇治拾遺物語』にあらわれたアスペクト形式-「Vある」「Vてある」「Vてあり」の選択要因について述べている。時代は下り、金鎔均(2017)では、西鶴の『浮世草子』にあらわれた4段活用動詞「飽く」「借る」「染む」「足る」の上一段化について調べている。西鶴の作品には文語的な性格が強く、従来あまり上方語の研究対象としては扱われていなかったが、今回の調査の結果、4段活用動詞の上一段化と位相による変容が行われていたことが明らかになった。

それから、『捷解新語』関連の論文も目立つ。趙燭熙(2017)では、『捷解新語』原刊・改修・重刊本に見られる「いく・ゆく・まいる」と、改修の時に用いられた言葉について調査し、その背景にも触れた。次に、李東郁・韓援炯(2018)では、『捷解新語』原刊本にあらわれた断定表現の形成および発展過程について述べている。閔丙燦(2017)では、『捷解新語』の否定表現「呉」に対応する日本語の表現を確認し、その改修に関して考察している。日本語の変化に対応し改修される場合が多いが、否定表現「呉」の場合は必ずしもそういう傾向をみせているわけではないことが確認された。

3.4.3 近代以降の文法研究

近代の文法研究は、主に、韓国語の資料もしくは韓国語とのかかわりがある論文が多い。まず、成琬珂(2018)は、1894年に日本参謀本部で編纂された『日韓会話』を紹介し、日清戦争当時の状況や言葉遣い、特に命令表現について取り上げている。10年の間に6版を重ねた『日韓会話』は、日韓、両国の変化に富む近代語や当時の様子を投影している価値の高い語学的、歴史的、教育的研究資料であると指摘している。

学習書の他にも、さまざまな資料から韓国語と日本語の文法事項を考察している。黄美玉(2018)では、近代の聖書を中心に、日本語と韓国語における対称詞の使い分けについて考察している。文学作品を対象に研究した論文も目立つ。安志英(2018a)では、韓国の翻案小説『雪中梅』(1908年)と、原作の末廣鐵腸の小説『雪中梅』(1886年初版)にあらわれた日本語の複合辞とその翻訳について述べてい

る。また、タク・ソンスク(2018)では、『不如歸』とその翻訳である『불여귀』・『두견성』の会話文に用いられた人称代名詞と呼称を比較、考察している。

金恩愛(2017)では、第一期(1894~1910)第二期(1910~1945)、第三期(1945~現在)の韓国の文学作品を対象に、二重否定表現にあらわれた日本語の影響について述べている。

ユ・スヨン(2017)では、1900年から1930年までの第一期、1980年から現在までの第二期にわけて韓国語と日本語の対訳資料を中心に使役表現の対応とその歴史的な変化を考察している。第一期には韓国語の方で過渡期的な様子がみられるが、第二期には自然な韓国語と対応するようになり、韓国語は動作主中心の能動的な表現を好み、日本語は動作に関与した側や動詞の性格などにより能動文・使役文・受身文を使い分けていると指摘している。

最後に、文学作品ではないが、文法項目自体がどのように確立されたのかについての研究を紹介したい。尹榮珉(2017)では、近現代日本文法書に現れた品詞名や分類体系に着目し、現代日本学校文法の成立過程を探っている。日本学校文法の品詞クリス分類形式は1700年代から出現しており、「体・用」、「言・辞」の観点が両立していた中、橋本によって原形が提示されたと言われているが、このような橋本の品詞分類体系に対する初期の概念や形はいわゆる折衷式文法書である岡倉由三郎の1891年『日本新文典』で既に確認できることを指摘している。

全体的に中世と近代に集中している傾向が見てとれる。また、中世は活用形の変化、近代は韓国語との比較を通じた変化の考察が目立つ。

3.5 その他

上記の文字表記・音韻・語彙・文法のカテゴリーには入らないが、日本語史関連の資料に対する書誌学的な考察を行っている論文、日本語と韓国語の翻訳関係の論文などが多数発表されている。資料の時代順に簡単に触れることにしたい。

3.5.1 書誌学的研究

まず、河正秀(2018)では、日本天理大学所蔵『楞嚴經諺解』（活字本、巻五、六）の矯正の内容と書誌情報を調べ、先行研究である菅野裕臣(1983)などを補っている。

李健相(2017、2018)では、18世紀の日本語のオランダ語学習書『和蘭譯文略草稿』『蘭學階梯』から前野良沢と大槻玄沢のオランダ語認識と学習について考察し、オランダ語の入門書『蘭學階梯卷下』の構成と内容について述べている。

一方、近世の朝鮮語との関連での資料についての考察も活発に行われている。朴才煥(2017)では、韓国内の日本語研究史をたどることで、『捷解新語』の言語研究資料としての価値を再確認している。ホ・ギュジン(2017)は、朝鮮の倭学書の中で辞書としての性格を持っている『倭語類解』に収録されている語彙と『捷解新語』(改修本)の語彙を比較、検討している。

また、日本で刊行された朝鮮語または韓国語の学習書についての研究もある。金文姫(2018)は、日本の朝鮮語学習書である『韓牘集要』と『隣語大方』の文例・内容などを照らし合わせ、年代考証と両書の関係について述べている。時代は少し下るが、李康民(2017、2018)では日本で刊行された韓国語学習書『新撰朝鮮會話』（洪奭鉉著、1894）と『朝鮮語獨修』（松岡馨著、1901）の書誌情報、構成、内容、語法などを詳しく紹介し、資料としての価値を述べている。ジン・ナムテク(2018)では、明治期に刊行された85種の韓国語学習書の目録を提示、研究現状を概観している。最近の研究パターンの紹介、対

訳コーパスの提案など当分野の研究の入門としても活用できると言えよう。逆に開化期の韓国で刊行された日本語学習書についての研究も盛んに行われており、黄雲（2017、2018）の『日語捷徑』（1895）、韓中瑄（2017）の『日語獨習』（孫鵬九著、1905年）、成琬珂（2018a）の『獨習新案日韓會話』（京城日語雜誌社、1906年）などがある。各論文は、著者の情報、刊行にあたった経緯、全体的な構成、語学的な特徴など、テキストの特徴について詳しく紹介している。

一方、学習書だけではなく、近代の教科書と教育制度に関する研究も持続的に行われている。明治期の検定教科書『尋常小学読本』と『高等小学読本』は、いわゆる開花期の韓国で編纂されて用いられた教科書『新訂尋常小学』と『国民小学読本』の底本である。甲斐雄一郎・李賢珍(2018)では、その教科書の関連性を検討するための基礎的な研究として、教科課程・教科書編纂の事情などについて考察している。成琬珂（2018b）では、上記で触れた明治期の検定教科書『高等小学読本』の理科コンテンツを中心に考察を行っている。朴孝庚（2018）では、明治前期の作文教育、特に小学校の教科課程と教科書に用いられた文体について考察している。時代は少し下り、朱美宣(2017)は1910年代の国語(日本語)の教科書である韓国の『普通学校国語読本』と日本の『尋常小学読本』を比較、考察している。

植民地時代の教科書について焦点を当てた論文もあり、宋淑正（2018）では、日本統治期に朝鮮総督府が発行した教科書を収取、書誌学の観点から分類、検討を行っている。結果、中等教育過程において簡易学校と実業学校が活性化され、従来知られていたよりも、多様な教科書が発行されていたことを指摘している。柳徹・金順楨(2018)は、小学校の地理教育に焦点を当て、その教科課程と教科書を分析している。

加えて、学習書や教科書ではないが、片茂鎮(2018)は、朝鮮総督府の機関誌『朝鮮』を取り上げ、日文版と国文版の対訳資料としての価値をさぐり、言語変化像を通時的に解釈できる資料性を確認した。

3.5.2 近代の翻訳関係の研究

最後に、近代の翻訳関連の論文を紹介したい。実際、翻訳を日本語史の下位分類で触れるのは適切ではないかもしれないが、近代の日本語史において重要な事項であり、多数の研究が行われているため、省かずに簡単に触れておきたい。

尹京愛(2017)では、尾崎紅葉の『金色夜叉』の翻案で、1913年に韓国の『毎日申報』に連載され大ヒットした『長恨夢』の翻訳過程で現れた変容を考察している。続いて、尹京愛(2018)では、閔泰瑗(ミン・テウォン)の『レ・ミゼラブル』の翻訳である『哀史』（毎日申報、1918-1919）の翻訳経路を確認し、その起点テキストとの比較を通じて翻訳の目的、方法、叙事構造の変容を明らかにしている。

閔丙燦(2018)では、Frances Burnettの『LITTLE LORD FAUNTLEROY』（1886）を翻訳した日本の『小公子』と韓国の『小英雄』を比較し、両テキストに直接的な関連はないことを確認したが、言語資料としては活用できるとしている。安増煥(2018)では、韓国と日本の聖書の中で「マルコによる福音書」にあられた漢語について考察している。第一次（1890年代）第二次（1910年代）第三次（1990年代）に分け、その特徴を述べた。ヒョン・ヨンミ、イ・キョンギョ（2017）では、ロシアの文学作品を翻訳した二葉亭四迷の『あひびき』と韓国語に重訳した金億の『密会』を取り上げ、句読点、文末表現、表記、オノマトペ、人称など、翻訳の技法と語彙を分析している。

以上、書誌学的には近世以降の資料が主に研究対象になっていることや、日本にある朝鮮の資料、日本語と韓国語の学習書、日本の教科書の影響をうけた韓国の教科書など、両国の言語や教育にかかわる資料を中心に研究されていることがわかる。西洋の文献の翻訳においても、両国に関連のある方向へと研究が進んでいることがわかる。

4. おわりに

本研究では、2017年から2018年まで、韓国で発表された日本語史関連の研究論文115編の概括し、その傾向を考察したものである。日本語史関連の論文を文字表記、音韻、語彙、文法、その他（翻訳、書誌学的な研究）の5分野に分けて時代順に概括した。全体的な特徴は、次のように整理することができる。(1) 分野別の多少の相違はあるが、研究対象が日本語だけにとどまらず、朝鮮半島・中国・ベトナム・琉球など、日本語関連の外国資料が多い。また、中国語と日本語、韓国語と日本語、英語と日本語など、複数の言語がテキストに用いられている多言語資料をもとに行われたものも多い。(2) 日本語の歴史の中で、主に焦点が当てられているのは、中世から近世に、あるいは近世から近代へと移行する時期に集中している。(3) 近代の資料は、東アジアの語彙交流、翻訳、植民地教育など多分野にわたって研究されており、継続的に増加すると予想される。

全体的な傾向としては、言語の歴史的研究であるため、書誌学的方法論に基づいて、従来の日本の研究の方法論を採用した論文が多いといえる。一方、研究対象は、韓国語との交流に加えて、中国、ベトナムなど漢字文化圏の言語交流と影響の関係など、扱う対象が広がっていることがわかる。国際化、多角化を通じた日本語の史的研究の活性化を期待したい。

<各分野別論文リスト>

<文字表記>

- 김문희(2017) 「『韓語覚書』の朝鮮語かな表記について -母音について-」 『日本語文學』 73(1) 한국일본어문학회 pp.3-29
- 박성희(2018) 「19세기 한자문화권에서의 어휘 교류에 관한 연구* -한국과 중국, 일본의 '러시아' 표기를 중심으로-」 『日本研究』 48 中央大學校 日本研究所 pp.89-105
- 변상숙(2017a) 「福沢諭吉 지리서에 나타난 외국지명의 한자표기 연구」 『日本近代學研究』 55 韓國日本近代學會 pp.39-54
- _____ (2017b) 「후쿠자와 유키치의 번역과 외국지명의 한자 표기 연구」 『日本語教育』 82 韓國日本語教育學會 pp.121-130
- 오미영(2017a) 「日本 東洋文庫所藏『古文孝經』(一〇995)의 訓讀 研究」 『口訣研究』 39 口訣學會 pp.169-194
- _____ (2017b) 「ソウル大学校藏『源氏物語』(貴3201/60B)の書き込みについて」 『日本語學研究』 54 韓國日本語學會 pp.125-138
- _____ (2018) 「일본 古文孝經 훈독의 계통에 관한 고찰」 『口訣研究』 41 口訣學會 pp.67-87
- 이지수(2017) 「『尔斯智王』의 仮名」 『日本語學研究』 53 韓國日本語學會 pp.109-123
- _____ (2018) 「『上宮太子系譜』의 音假名」 『日本語學研究』 58 韓國日本語學會 pp.135-149
- 鄭炫赫(2017) 「『ひですの経』の和語の仮名遣い」 『日本研究』 73 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.149-174
- _____ (2018) 「慶応義塾図書館蔵『狭衣の中将』の仮名の用字法」 107(1) 韓國日語日文學會 pp.26-51
- 佐藤亜里紗・朴英淑(2017) 「有島武郎『或る女』を通して見る外来語表記」 『日本學報』 113 韓國日本學會 pp.47-66
- 青木浩之(2017) 「夏目漱石の形容詞の表記の異同「いい・よい」を中心に」 『日本近代學研究』 58 韓國日本近代學會 pp.27-46

- 清水れい子(2017)「『日本霊異記』における「恐怖心」の表記に 関する考察」『比較日本學』40 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.291-314
- 한경호(2017)「東京大学国語研究室所蔵清原宣賢の訓点本『中庸章句』と『經典釈文』の比較研究 - 音素を中心として」『日本研究』27 高麗大學校 글로벌日本研究院 pp.63-102
- 斎藤達哉(2018)「仮名写本における漢字「候」の省略字体—仮名の表記システムの中で生じた新たな漢字字体—」『日本語學研究』56 韓國日本語學會 pp.19-36

〈音韻〉

- 김대성·김영화(2017)「「へ(舳)」と 「び(船)」の関連性について」『日本研究』44 中央大學校 日本研究所 pp.27-42 음성음운
- 고수만(2018)「상대일본어의 ㄷ열의 구분표기의 음운적 성격에 대하여」『日本言語文化』45 韓國日本言語文學會 pp.123-135
- 김영옥(2017)「외학서에 나타난 치·츠 음에 대하여」『日本語教育研究』39 韓國日語教育學會 pp.39-52
- 金正彬(2018)「安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經의 성조연구—음성음운학적 관점에서—」『日本語教育研究』43 韓國日語教育學會 pp.43-61
- 李京哲·吳采炫 (2017)「中古音 多音字의 類型에 대한 고찰-聲類를 중심으로-」『日本語學研究』54 韓國日本語學會 pp.169-188
- 李相怡·李京哲(2017)「베트남한자음 舌音系의 반영양상 - 한일한자음과의 비교를 중심으로 -」『比較日本學』40 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.337-356
- 李承英(2017)「중세 韻書에 나타난 唇內撥音字의 漢字音 연구」『日本語教育』80 韓國日本語教育學會 pp.43-60
- 朴美賢(2017)「석일본기(釋日本紀)에 보이는 한국계 고유명사의 성점(聲點)연구」『日本研究』44 中央大學校 日本研究所 pp.43-60
- 이경철(2018a)「多音字에 걸친 陽聲韻의 互用에 관한 考察」『日本語學研究』58 韓國日本語學會 pp.101-114
- _____ (2018b)「多音字에 나타나는 入聲과 陰聲의 互用에 관한 考察」『比較日本學』43 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.417-432
- _____ (2018c)「中古音 多音字의 互用에 관한 고찰 - 3·4等韻을 중심으로 -」『日本學報』116 韓國日本語學會 pp.45-63
- 蔣垂東(2017)「日本語の ス・ツ の母音と中国語の舌尖前母音について」『日本學』43 東國大學校 日本學研究所 pp.183-202
- 趙垺熙(2018)「『朝鮮王朝實錄』に見られる日本音漢字表記の日本語音韻資料としての價值について」『日本言語文化』42 韓國日本言語文學會 pp.107-125
- 趙大夏(2018)「琉球語의 母音體系에 대한 研究 - 『琉球館譯語』와 『語音翻譯』의 音訳表記를 중심으로-」『日本語文學研究』104-1 韓國日語日文學會 pp.147-162
- 趙來喆(2018)「日本語史における音韻變化の考察 -いかに日本語教育に役立てられるか-」『日本語文學』76-1 한국일본어문화학회 pp.49-63

〈文法〉

- 金鎔均(2017)「西鶴의 浮世草子에 보이는 4단활용동사(「飽く」「借る」「染む」「足る」)의 상1단화에 관한 일고찰」『日本研究』46 中央大學校 日本研究所 pp.7-23
- 金恩愛(2017)「한국어 이중부정표현에 보이는 일본어의 영향—19세기말 이후 문학작품을 중심으로—」『日本言語

- 文化』38 韓國日本言語文學會 pp.153-172
- 金平江(2017) 「室町時代일본어 존재표현의 양상 -연체수식표현을 중심으로-」 『日本語文學研究』 102-1 韓國日語日文學會 pp.41-58
- 李妙熙(2018) 「助詞「なり」の成立 -不十分終止から並立・副助詞へ-」 『日本研究』 77 韓國外國語大學校日本研究所 pp.269-286
- 민병찬(2017) 「『捷解新語』의 <뭇 부정>과 그 改修에 관한 일고찰」 『比較日本學』 40 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.239-256
- 박영숙(2017) 「日本語に於ける言文一致体と文末表現について-指定詞を中心として-」 『日語日文學』 76 大韓日語日文學會 pp.27-38
- 박종승(2018) 「일본어 수동표현의 변화양상- 8~10세기 고대어를 중심으로(1) -」 『比較日本學』 43 漢陽大學校日本學國際比較研究所 pp.183-202
- 成玟珂(2018) 「근대 한어회화 학습서의 어학적 고찰-『일한회화』의 명령표현을 중심으로-」 『日本文化研究』 66 東アジア日本學會学会 pp.161-181
- 안지영(2018) 「일본 근대 어법과 변안·번역 소설」 『日本語文學』 81 일본어문학회 pp.121-138
- _____(2018) 「複合辞「-からして」의 變遷에 관한 一考察」 『日本語文學』 83 일본어문학회 pp.165-179
- 오미영(2018) 「東京大 國語研究室 소장 『中庸章句』(21H11) 훈독의 내용적 고찰」 『日本研究』 76 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.221-240
- 유수연(2017) 「일·한어 사동표현의 대응 양상과 史的 변화- 20세기 초기 이후 일·한 한·일 대역 자료를 중심으로 -」 『日本語教育』 79 韓國日本語教育學會 pp.59-73
- 윤영민(2017) 「현대 일본 학교문법의 성립 과정 고찰-품사명과 분류 체계를 중심으로-」 『日本語學研究』 54 韓國日本語學會 pp.155-168
- 이동욱·한원형(2018) 「『접해신어』의 단정표현 연구」 『日本語文學』 83 일본어문학회 pp.243-264
- 이성규(2017) 「日本語口語訳新約聖書における〈おる〉の 使用実態」 『日本言語文化』 38 韓國日本言語文學會 pp.67-84
- _____(2018) 「『なさる』에 의한 존경어 형식과 사역의 존경화* -일본어 구어역 신약성서를 대상으로 하여-」 『日本研究』 48 中央大學校 日本研究所 pp.7-29
- 이수향(2017) 「이소호모노가타리의 추량표현에 관한 고찰-아마쿠사본과 고쿠지본의 비교를 통하여 -」 『日本文化研究』 62 東アジア日本學會学会 pp.213-233
- _____(2017) 「중세후기 자료에 나타나는 추량조동사 「べし」의 사용양상- 구어와 문어자료의 비교를 통하여 -」 『比較日本學』 40 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.357-374
- 林禎映(2018) 「副詞句「ことに」の成立と展開」 『日本言語文化』 45 韓國日本言語文學會 pp.77-91
- _____(2018) 「中・近世日本語における副詞の感動詞化-応答型感動詞用法を例にして-」 『日本言語文化』 43 韓國日本言語文學會 pp.145-158
- 趙垺熙(2017) 「『捷解新語』に見られる「いく・ゆく・まいる」について」 『比較日本學』 39 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.397-414
- 탁성숙(2018) 한·일 양국어의 인칭대명사와 호칭 - 호토토기스(不如歸)와 불여귀·두견성의 대화문을 대상으로-발행 기관 : 한국일어일문학회 간행물 : 일어일문학연구 107권 1호 발행 연도 : 2018 페이지 : pp. 103-127 (25 pages)
- 黃美玉(2018) 「日本語と韓国語における対称詞の使い分けについての考察-近代聖書の使用を中心として-」 『日本研究』 75 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.285-311
- 野田高広(2018) 「『宇治拾遺物語』のアスペクト形式について -「Vある」「Vてゐる」「Vてあり」の選択要因-」

『日本言語文化』43 韓國日本言語文學會 pp.25-42

〈語彙〉

- 김성근(2017) 「동아시아 근현대 물리학 용어의 성립-메이지 일본의 '물리학 여학회(1883)' 설립을 중심으로-」 『동서철학연구』 85 한국동서철학회 pp.291-314
- 김성은(2017) 「근대 조선의 선교의료와 번역 -일본어 『実用解剖学』에서 한국어 『해부학』으로-」 『日本語教育』 79 韓國日本語教育學會 pp.109-129
- 羅工洙(2017a) 「近世・近代における「標致」類とその意味用法について」 『日本語文學』 73(1) 한국일본어문화회 pp.31-62
- _____ (2017b) 「近世・近代に於ける「阿〜」系列の中国語の呼称について」 『日本近代學研究』 55 韓國日本近代學會 pp.7-38
- _____ (2018a) 「近世・近代における中国語の人称代名詞「儂(咱)・渠」の受容と展開」 『比較日本學』 43 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.139-162
- _____ (2018b) 「世・近代における中国語の接尾辞「〜家」の受容と意味用法」 『日本近代學研究』 59 韓國日本近代學會 pp.7-42
- 柳玟和(2017) 「道頭の日本世記における人名記載について」 『日本語文學』 76 일본어문화회 pp.93-120
- 박균철(2017) 「井上忻治 대역사전에 관한 고찰-『最新独和法律經濟辞典』4종을 중심으로-」 『日本語文學』 73-1 한국일본어문화회 pp.63-76
- 朴善玉(2017) 「室町時代の混種語の語構成に関する考察」 『日本文化研究』 61 東アジア日本學會学会 pp.51-75
- _____ (2018) 「『平家物語』における混種語の語種構成と構成要素の考察」 『日本文化研究』 68 東アジア日本學會学会 pp.159-184
- 朴孝庚(2017) 「近代語「浪漫」の成立と変遷」 『日本言語文化』 41 韓國日本言語文學會 pp.173-189
- 서호철(2018) 「『七情』에서 '感情'으로- 감정 관련 번역어의 수용과 사용」 『사회와 역사』 118 한국사회사학회 pp.39-79
- 尹榮珉(2018) 「『皇國文典初學』の「文法」-『日本小文典』と『日本文章法初歩』との比較を中心に-」 『日本言語文化』 43 韓國日本言語文學會 pp.89-104
- _____ (2017) 「근현대기 일본문법서에 사용된 「문법」- 「문법」의 개념과 정의-」 『日本言語文化』 40 韓國日本言語文學會 pp.131-150
- 이명숙(2017) 「語義変化와 類義語의 고찰 -中世 기리시탄 資料의 「懷かし」「恋し」「思ふ」를 중심으로-」 『日本學研究』 51 檀國大學校 日本研究所 pp.333-352
- 李炳萬・李東郁(2017) 「『金色夜叉』の人称代名詞について -『日本口語入門』『和英語林集成』と比較して-」 『比較日本學』 41 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.363-384
- 이자호(2017) 「한·중·일의 근대 어휘 교류에 관한 연구 - 삼페인의 표기와 개념-」 『日本語學研究』 52 韓國日本語學會 pp.53-64
- _____ (2018) 「한국 기독교 용어의 교체에 관한 연구-禮拜堂과 教會-」 『日本語學研究』 56 韓國日本語學會 pp.103-119
- 이현정(2018) 「20세기 초 신어의현대 일본어에서의 정착에 관한 연구-사전, 코퍼스, 구글 검색엔진을 활용하여-」 『日本研究』 49 中央大學校 日本研究所 pp.61-80
- 정하미(2018) 「일제 강점기 서울의 일본식 지명에 대한 고찰」 『比較日本學』 42 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.105-120

- 趙英姬(2017) 「近現代語における「多分」の副詞用法の定着」 『日本言語文化』 38 韓國日本言語文學會 pp.85-102
- 최경옥(2017) 「메이지기, 번역한자어의 성립과 한국 수용 고찰 - [society]가 [사회(社会)]로 번역되기까지 -」 『比較日本學』 39 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.415-432
- _____(2018) 「메이지기, 번역한자어의 성립과 한국 수용 고찰 - [liberty]가 [자유(自由)]로 번역되기까지」 『比較日本學』 42 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.353-372
- 현영미·이경규(2017) 「고전 중국어 오노마토펬의 일본어 수용에 관한 연구 - 명치기 문헌에 나타난 접어형태의 응례를 중심으로 -」 『日本近代學研究』 55 韓國日本近代學會 pp.69-84
- 邢鎮義(2017) 「近代日本の「国語」と大槻文彦の言語觀」 『日本文化學報』 74 韓國日本文化學會 pp.173-187
- _____(2018) 「近代日本の「国語」構築と辞書-『言海』を中心に-」 『日本文化學報』 78 韓國日本文化學會 pp.429-446
- 石塚令子(2017) 「「車(クルマ)」の語誌」 『日本言語文化』 40 韓國日本言語文學會 pp.7-25
- 塩田雄大(2018) 「1930年代後半の漢語の読み方の整理状況 -『辞苑』と『放送用語調査委員会決定語彙記録(一)』の対照 -」 『日本語學研究』 55 韓國日本語學會 pp.109-126
- 〈その他(書誌・翻訳)〉
- 金文姬(2018) 「「韓牘集要」と「隣語大方」-「韓牘集要」年代考証と兩書の関係について-」 『日本語文學』 77(1) 韓國일본어문학회 pp.213-237
- 민병찬(2018) 「『小公子』와 『소영웅(小英雄)』에 관한 일고찰- 언어연구 자료로서의 활용 가치를 중심으로 -」 『日本學報』 114 韓國日本學會 pp.1-18
- 박재환(2017) 「「捷解新語」の言語研究資料としての価値について 韓国内の日本語研究史を中心に」 『日本近代學研究』 58 韓國日本近代學會 pp.7-26
- 박효경(2018) 「메이지 전기의 작문 교육과 문제」 『日本語文學』 76-1 韓國일본어문학회 pp.27-48
- 성윤아(2018) 「개화기 한국의 일본어교육 콘텐츠- 일어잡지사『독습신안일한회화』-」 『日本語教育研究』 43 韓國日語教育學會 pp.137-151
- _____(2018) 「근대 일본 검정교과서『고등소학독본』의 연구 - '이과'의 교육콘텐츠를 중심으로 -」 『日本學報』 115 韓國日本學會 pp.303-322
- 宋淑正(2018) 「일제강점기 조선총독부 발행 국어(일본어)독본에 관한 서지학적 고찰」 『日本語學研究』 58 韓國日本語學會 pp.45-61
- 安增煥(2018) 「성서 번역과정에 나타난 한일 공통 한자명사의 변화 추이-마가복음 번역사를 중심으로-」 『日本文化學報』 76 韓國日本文化學會 pp.363-385
- 유철·김순전(2018) 「일제강점초기 초등지리 교육 고찰-조선총독부편찬 일본어·지리교과서를 중심으로-」 『日本文化學報』 76 韓國日本文化學會 pp.5-25
- 윤경애(2017) 「『金色夜叉』의 한국어 번안에 나타난 변용양상 고찰」 『日本語學研究』 51 韓國日本語學會 pp.145-164
- _____(2018) 「민태원의『레 미제라블』번역 연구 -일본어 기점텍스트와의 비교를 중심으로-」 『日本語學研究』 56 韓國日本語學會 pp.75-102
- 이강민(2017) 「『新撰朝鮮會話』의 日本語와 韓國語」 『日本語文學』 75(1) 韓國일본어문학회 pp.51-67
- _____(2018) 「松岡馨 著『朝鮮語獨修』에 대하여」 『比較日本學』 44 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.203-216

- 이건상(2017) 「18세기말 네덜란드어 입문서 고찰—『蘭學階梯 卷下』의 구성 및 내용을 중심으로—」 『日本研究』 46 中央大學校 日本研究所 pp.81-101
- _____(2018) 「마에노 료타쿠(前野良沢)와 오쓰키 겐타쿠(大槻玄沢)의 네덜란드어 인식과 학습-寫本『和蘭譯文略草稿』와 刊本『蘭學階梯』를 중심으로」 『日本研究』 49 中央大學校 日本研究所 pp.43-60
- 朱美宣(2017) 「1910年代国語(日本語)教科書についての一考察—『普通学校国語読本』と『尋常小学読本』を中心に—」 『日本言語文化』 39 韓國日本言語文學會 pp.103-115
- 진남택(2018) 「메이지기 한국어학습서의 연구현황」 『比較日本學』 43 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.39-54
- 편무진(2018) 「韓日語 對譯資料로서의 『朝鮮』誌」 『日本文化學報』 76 韓國日本文化學會 pp.405-420
- 하정수(2018) 「日本 天理大學 所藏 活字本 楞嚴經諺解 권5, 권6의 교정 연구」 『口訣研究』 41 口訣學會 pp.129-159
- 한중선(2017) 「韓國 開化期 日本語 學習書『日語獨習』에 관한 考察」 『日本研究』 74 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.593-612
- 현영미·이경규(2017) 「근대 러시아 문학작품에 나타난 일·한 번역 비교 — 후타바테이 시메이의 『아이비키』와 김억의 『밀회』 번역을 중심으로 —」 『日本語教育』 81 韓國日本語教育學會 pp.43-60
- 호규진(2017) 「왜어유해 어휘의 성격 — 첨해신어 개수본과의 비교를 중심으로 —」 『日本學報』 112 韓國日本學會 pp.87-106
- 黃雲(2017) 「韓國開化期の日本語教育に関する考察-日本語学習書による日本語教育の成立を中心に-」 『日本語文學』 72(1) 한국일본어문학회 pp.175-193
- _____(2018) 「韓國開化期の日本語学習書 『日語捷徑』(1895)について」 『日本文化學報』 78 韓國日本文化學會 pp.153-168
- 甲斐雄一郎·李賢珍(2018) 「『尋常小学読本』『高等小学読本』の同時代的な位置づけ—『新訂尋常小学』『国民小学読本』との関連を検討するための基礎的研究—」 『日本學報』 117 韓國日本學會 pp.159-182

【参考文献】

- 康仁善(2017) 「日本語史研究の現状と展望」 『日本語学研究』 51 韓国日本語学会 pp.57-65
- 朴海煥(2011) 「韓国の日本語研究の方向性」 『日本語学研究』 32 韓国日本語学会 pp.85-103
- 安平鎬(2012) 「海外における日本語研究：アジアを中心に」 『日本語の研究』 8(3) 日本語学会 pp.116-119
- 俞長玉(2008) 「『日本語文学』の研究動向分析」 『日本語文学』 43 日本語学会 pp.145-162
- 尹幸舜(2010) 「海外における日本語研究」 『日本語の研究』 6(3) 日本語学会 pp.120-125
- 李康民(2008) 「韓国における日本語の研究(2005~2006):専門學術誌の研究動向」 『日本學報』 74 韓國日本學會 pp.427-450
- 李鳳姬(1988) 「韓国における日本語の研究」 『日本學報』 20 韓國日本學會 pp.3-31
- 李漢燮(2002) 「海外における日本語研究-韓国-」 『国語学』 53(4) 国語学会 pp.115-123
- 洪珉杓(2017) 「韓国日本語学研究の現況と展望」 『日本語学研究』 51 韓国日本語学会 pp.5-8
- _____(2018) 「韓国日本語学の研究現況と課題」 『日本研究』 78 韓國外國語大學日本研究所 pp.27-46

〈요 지〉

일본어사 연구의 현황과 전망

본 연구는 2017년에서 2018년까지 한국에서 발표된 일본어사 관련 연구논문 108편에 대해 개괄하고 그 경향을 고찰한 것이다. 일본어사 관련 논문을 문자표기, 음운, 어휘, 문법, 기타(번역, 서지학적 연구)의 5분야로 나누어 시대순으로 개괄하였다. 전체적인 특징은 다음과 같이 정리할 수 있다. (1)연구 대상이 일본어와 관련된 외국자료, 다언어자료(多言語資料-한국어, 일본어, 중국어, 영어 등이 한 텍스트 안에 같이 사용됨)를 토대로 이루어진 것들이 현저하게 많다. (2)일본어의 역사에 주로 초점을 맞추는 경우는 중세에서 근세로, 혹은 근세에서 근대로 이행하는 시기에 집중하고 있다. (3) 근대의 자료는 동아시아의 어휘교류, 번역, 식민지 교육 등 다분야에 걸쳐 연구되고 있으며, 지속적으로 증가할 것으로 예상된다.

전체적인 경향으로는 언어의 역사적인 연구이기 때문에 서지학적인 방법론을 바탕으로 전통적인 일본어 연구의 방법론을 채택한 논문이 많다고 할 수 있다. 반면 연구 대상은 한국어와의 교류 뿐만 아니라, 중국, 베트남 등 한자문화권의 언어교류와 영향관계 등을 다루는 것으로 넓어지고 있음을 알 수 있다. 국제화, 다각화를 통한 일본어사 연구의 활성화를 기대해 본다.

논문분야 : 일본어사

키워드 : 가나의 용자법, 한자음, 문법의 변화, 근대어휘교류, 식민지 교과서

■ 박효경(朴孝庚)

한양사이버대학교 조교수

hkpark27@hanmail.net

■ 投稿日 :	2019년	1월	5일
■ 審査開始 :	2019년	1월	14일
■ 審査完了 :	2019년	2월	7일
■ 掲載確定 :	2019년	2월	11일